『百科全書』研究についての典拠調査の意義

小 関 武 史

序

本論の目的は、デイドロが中心になって編集した『百科全書』を研究するに当たっては、典拠として用いられた文献の実証的な調査が不可欠であることを、具体的な事例に即して示すことにある。主題の性質上議論が細部に及ぶので、あらかじめ『百科全書』の出版経緯を簡単に紹介し、全体像を呈示しておこう。

フランスの『百科全書』は、もともと一七二八年にロンドンで出版されたチェンバーズの『百科辞典(サイクロペディア)』のフランス語訳として構想された。一七四五年に持ち上がった計画は、次第に大がかりなものとなる。一七五〇年に配布された『趣意書』によれば、

『百科全書』は本体八巻、図版二巻から成る予定であった。この時点ですでに、二折版で二巻にすぎない『サイクロペディア』の翻訳という枠をはみ出している。様々な事情があって、『百科全書』は最終的に三十五巻の大著となった。その内訳は、本体十七巻、図版十一巻、補遺四巻、補遺の図版一卷、索引二巻である。ただし、デイドロやその協力者たちが関わったのは本体とその図版までで、補遺および補遺の図版は十年強の間隔を置いて、別の出版業者が別の編集者を立てて発行したものである。したがって、思想上の意義を考えるならば、本体および本体の図版二十八巻と、補遺および補遺の図版五巻とは、明確に区別すべきであり、本論で扱うのも前者に限定する。なお、索引は本体と補遺を含めた全部を対象と

している。

『百科全書』の第一巻が発行されたのは、一七五一年六月二十八日のことであった。これ以後、おおむね一年に一冊のペースで刊行が進むが、一七五七年十一月に第七巻が出版されたのを最後に、事業が一時中断する。事典はまだGの項目までしか進んでいない。出版社連合とデイドロは、極秘の裡にH以下の項目を含む巻の編集作業を続けるとともに、図版を拡張することによって事業の継続を図った。ダランベールは編集者としての責任を放棄し、デイドロを支える中心的協力者はドルバックとジョークールになる。第八巻から最終第十七巻までの十冊は、一七六五年の末から翌年初めにかけて一括して配布された。出版こそ果たしたものの、依然として『百科全書』をめぐる状況は厳しい。その中において、デイドロは引き続き図版の編集作業に従事し、一七七二年にこれを完結させる。

以上が『百科全書』の出版経緯である。

一 『百科全書』の独自性

『百科全書』は、フランス啓蒙思想の集大成と位置づ

けられている。『学問、技術、工芸の合理的事典』という副題を持っていることから明らかなように、それは人間の知のあらゆる領野を理性に基づいて記述し、一箇所にまとめるといふ記念碑的事業であった。そのような理念に照らしてみれば、『百科全書』の独自性は明らかである。『百科全書』以前にも、言語の辞典には優れたものがいくつか存在した。個別的な主題に限定した事典も発行されている。たとえば、後に言及するサヴァリーの『通商事典』などが成功を収めている。幅広い知識を提供することを目的としていたという意味では、チェンバーズの『サイクロペディア』が先行するが、収録項目は自然科学中心で偏りがあるうえに、規模の点でも見劣りがする。『百科全書』は他に類例のない偉業であった。

しかし、計画の独自性は内容の独自性を保証するものではない。『百科全書』に収められた七万余の項目の中には、新たに書き下ろされたわけではないものも相当含まれている。たとえば、執筆者として名前が判明しているうちで最も多くの項目を『百科全書』に寄稿したのはジョークールであるが（一万七千を超えているので、数に

してほぼ四分の一にも達する)、彼の手になる項目は、往々にして別の文献からの引き写しである。もちろん、執筆者が渾身の力を込めて新たに筆を起こした項目も存在する。そしてそれらの項目がしばしば大きな反響を呼んだことは事実であるが、剽窃なしには『百科全書』が成立しなかったこともまた、厳然たる事実なのである。

それでは、内容の独自性に問題のある『百科全書』には価値がないのかというと、事はそう単純ではない。三つの理由を指摘しておこう。第一に、著作権といった今日広く通用している価値観で二百年以上前の著作を判断することは適切でない。他人の文章を書き写してはならないという共通の了解は、この時代には存在しない。第二に、『百科全書』の出版という事業の規模の大きさおよび反対勢力による妨害を考慮に入れると、すべてを一切から築くことは不可能であったと言わざるをえない。剽窃は必要な手段であった。第三に、もう少し積極的に剽窃を評価すると、分散した知識を一箇所にまとめることには大きな意味がある。ある分野について残された膨大な記述から、写すに値するものを選び出すには相当な眼力が要求されるであろうことも、想像に難くない。現物

が失われ、『百科全書』に取り込まれたおかげでかろうじて今日に伝わっている文章もある。また、散佚はまぬがれていても、『百科全書』に言及があることによって初めて現在の人々の目に留まる文献も少なくはない。要するに、項目の一部が他の文献からの丸写しであったとしても、そのことによって『百科全書』の価値が損なわれるものではないのである。

二 典拠研究に秘められた可能性

すでに見たように、『百科全書』には過去の著作からそのままの形で取り込まれた項目が存在する。写された部分と書き下ろしの部分を区別するためには、当然のことながら、典拠の調査を綿密に行う必要がある。手順としては、ある項目について、それが何らかの文献から引用ないし要約されていることを証明し、そのうえで典拠がどのように利用されているかを分析することになる。

『百科全書』の項目本文と典拠の文章を照合すれば、執筆者が何を足したか、何を削ったか、あるいは何も変えずに写したか、要するに素材をどのように処理したかが明らかとなる。執筆者自身の見解は、まさにこの処理の

仕方に表われているのである。たとえば、デイドロは哲学史に関する諸項目を執筆するに際して、ブルッカーの『哲学の批判的歴史』というラテン語の大著を参照したが、必ずしも原文を忠実に翻訳したわけではない。デイドロはブルッカーの厳密に過ぎる記述を大胆に削除したり、別の方向に話を展開したりする。また、ブルッカーが論じた哲学者の中には、デイドロがあまり関心を示さない人々もいる。⁽¹⁾ブルッカーの原著とデイドロの書いた項目を直接比較すれば、デイドロの哲学観の一端が明らかになるだろう。

以上は、直接的な典拠との関連において、執筆者の介在した部分を明らかにする試みであるが、実際には使用されなかった典拠との関連も念頭に置いておく必要がある。つまり、同様のテーマを扱った他の文献を差し置いて、ある一つないし複数の文献が典拠として活用されている以上、その選択のうちに項目執筆者の最初の意志表示が看取されると言える。哲学史を扱った著作は他にもあったが、デイドロはドイツ人牧師のラテン語の大著を活用した。理由を一つに限定することはできないが、批判精神に裏打ちされたブルッカーの記述をデイドロが好

んだことは確実である。『哲学の批判的歴史』を他の哲学史の著作と比較対照することは、間接的にデイドロの哲学観を照らし出すだろう。

典拠の研究は、直接ないし間接の影響関係を知るうえで決定的に重要であるが、効果はそれだけにとどまらない。活用された典拠を手がかりにすれば、時として無署名項目の筆者を特定しうる。この問題については細部にわたった議論が必要であり、第四章において詳しく検討することにしよう。

三 典拠特定の障碍

このように、典拠に関する調査には大きな意義があるのだが、実際上の困難もまた大きい。端的に言うると、『百科全書』の項目執筆者たちが参考にした典拠を突き止めるに足るだけの情報は、往々にして不完全なのである。そして、この不完全さにも様々な種類があり、それに応じて障碍の克服の仕方も異なってくる。不完全さを三種類に分け、順を追って検討しよう。

第一に、情報が完全に欠落している場合がある。ある項目が何からの文献に基づいて書かれていても、執筆者

が典拠として用いた文献の書名や著者名を示すとは限らない。これは必ずしも意図的に出典を隠匿しようとしたというよりも、わざわざ注記する必要があるという判断に基づいているのかもしれない。

この種の項目においては、直接的な手がかりがないために、典拠が存在する可能性にさえ想い至らないおそれがある。しかし、記述が十分に長ければ、精度の高い推測も可能となる。まず、当該項目が何を扱っているかに注目すれば、その分野についての基本文献の名がいくつか挙げられる。次に、執筆者が明らかであれば、それら基本文献のうちどれを捨ててどれを選んだか、候補を絞り込むことができる。たとえば、蔵書目録に記載のある文献は利用されている可能性が高いと言える。また、ある主題に関する一連の項目が特定の人物に任されたとする、その担当者は扱って立つべき文献を定めたうえで稿を起していると考えられるので、類似の主題を扱った項目に手がかりがあるかもしれない。このような推論の方法は、以下に述べる第二、第三の不完全さを乗り越える手段にもなりうる。

第二に、情報が不十分な形でしか示されていないとい

う意味での不完全さがある。このような事例において典拠を特定するためには、限られた情報を頼りに全体像を復元する作業が求められる。たとえば、ルイ・ジャン・マリイ・ドーバントンが執筆した《雉》(第六巻)という項目には、「クライン氏は雉を六種類に分けている」という記述があるが、ここで言及されているクライン氏というのがヤコブ・テオドル・クラインであること突き止めるのは容易なことではない。

この他にも、書名や著者名が省略した形で示されている例は枚挙にいとまがない。比較の便を考慮して、上に例を引いたドーバントンの別の項目を見ることにしよう。第四巻に収められた《鰐(クロコダイル)》という項目では、ある段落の末尾に *Hist. nat. des îles Ant.* という文献名が、省略した形で示されている。⁽²⁰⁾ これは正式表題を *Histoire naturelle des îles Antilles* (『アンチル諸島博物誌』) といいい、シャルル・ド・ロシュフォールが一六六七年にリヨンで上梓した著作である。ここでは省略の仕方が比較的素直であるため、正式表題を突き止めることにそれほど苦労はないが、中には分かりにくいものも存在する。

さらには、版を重ねた文献に関して、増補改訂によって内容に変更があれば、複数の版本を比較検討する必要が生ずる。『百科全書』の項目執筆者がどの版本を使用したかを明示することは稀である。『百科全書』に収められた通商関係の項目のうち、デイドロやマレ神父が執筆した分にはジャック・サヴァリー・デ・ブリュロンが著した『通商事典』を典拠とするものが多いが、この事典にはいくつかの異なる版がある。初版は一七二三年から一七三〇年にかけて、二折の三巻本として出版された。

その後、版型や巻数の異なるものが登場したが、増補改訂が行われたという意味での新版が一七四一年に世に送り出されている。デイドロやマレ神父が提供した項目をつぶさに検討すると、一七四一年の改訂版にしか存在しない記述が見受けられる。これによって、彼ら百科全書派が依拠したのは一七四一年版であるか、もしくはこれを複製した版であることが明らかとなる。以上が、典拠に関する情報の一部に欠損がある場合であり、実証的な調査を積み重ねなければならない。

第三に、意図的であるかどうかは別として、虚偽の情報に記載されている場合が少なくないことに注意する必

要がある。

まず、単純な誤植を取り上げてみよう。綴りと数字に関する表記上の間違いを含む例を、一つずつ示すことにする。第十三巻に収められた《橋》という無署名項目は、典拠としてFischerの名を挙げるが、これは正しくはFischerと綴る⁽⁴⁾。第二巻所収の項目《二進法算術》はフォルマーに負う旨が明記されており、そのフォルマーは「パリの科学アカデミー年報一七〇二年号からこの項目を引いている」という⁽⁵⁾。しかし、一七〇二年号というのは誤りで、実際には一七〇三年号に該当の記述が存在する⁽⁶⁾。これらは単なる不注意であり、論理的な推測がしにくいという意味では厄介であるが、項目に記載された情報に不正確な部分があることまでは比較的簡単に判明する。

ところが、よほど気をつけていない限り、情報に含まれた虚偽を見過ごしてしまう事例が存在するのである。ジョクールが執筆した項目《チェス》(第五巻)を例にとって検討してみよう。ジョクールはこの項目の中で英国人トーマス・ハイドの『東洋の遊戯について』というラテン語の著作に言及し、これをふまえているように見

える。⁽⁷⁾しかし、真の典拠は別にあり、『文学アカデミー年報』第五巻に収められた「チェスの起源」という無署名の論文⁽⁸⁾がそのままの形で写されているのである。ジョークールから見ると、ハイドは典拠の典拠にすぎない。結果的に中間項となった『文学アカデミー年報』の名は伏せられている。ジョークールの書いた項目にはこのようなものが多い。ジョークールばかりではない。ディドロの書いた重要項目『聖書の年代記』(第三巻)には、キリスト教の聖典に対する疑義が巧妙に織り込まれているが、ここで名前の挙がっているコルトホルトは見せかけの典拠である。真の典拠は、明示されていないブルッカーの『哲学の批判的歴史』であり、コルトホルトの説はそこで紹介されているだけなのである。

このように、項目執筆者が典拠として用いた文献にさらに別の典拠がある場合に、直接の典拠をそのまま写した(もしくは要約した)結果として、項目から見て二次的な典拠への参照指示のみが我々の目に触れていることがある。『百科全書』の項目に忍び込んだ典拠に関する虚偽は、それ自体としては見分けがつかない。典拠を体系的に調査する過程で、思いもかけず真相があらわにな

るのを期待するしかないのが実状である。

以上、実例を挙げながら検討してきたように、『百科全書』の項目に見受けられる典拠に関する情報には、様々な性質の不完全さがある。このような障害を乗り越えて典拠を特定するためには、実証的な調査を積み重ねなければならぬ。文献の名前が明示されている場合でも、それが直接の典拠とは限らないことは、すでに見た通りである。必ず現物を実際に調査し、どの部分がどのように活用されているかを確認する必要がある。時には、これは典拠ではないというマイナスの断定も生ずるだろう。文献名が明らかでなければ、つまり書名の一部が省略されていたり、著者とおぼしき人物の名前のみが記されているようなときには、目録などの手段を用いて候補文献を絞り、その後は先ほどと同じ手順をふむことになる。書名も著者名も欠落しているなら、内容をもとにある程度の見当をつけるところから始めなければならないだろう。しかし、それは決して無からの出発ではない。ある項目において典拠として用いられた文献は、他の項目でも利用されていることが多い。『百科全書』から典拠を突き止めるという方向とは逆に、典拠の可能性があ

る文献を博搜し、そこに『百科全書』の項目の原型を認めるという方向もありうる。また、典拠に関する調査を進めるにつれて、知識の集積が相乗効果を生むことも見逃せない。たとえば、我々はジョークルが丸写しを厭わないことを知っている。すると、ジョークルの項目の中に、ある文献に見られるのとそっくりの文章を認めても、両者の間に微妙な違いがあれば、何か別の典拠があるのではないかという疑念を抱く。その疑念が出発点となつて、真の典拠に到達することもあるのである。⁽⁹⁾

もとより、典拠の特定は完全ではありえない。すべての項目の典拠を突き止めることは不可能である。しかし、どこまで判明し、どこから先が分からないかを線引きしておくことは、後世の研究者にとって有益であるにちがいない。

四 典拠の調査と無署名項目

以上のように、『百科全書』の典拠に関する情報は甚だ不十分なのであるが、裏を返せば、今後の丹念な調査によって、典拠の特定をもとにした新発見がありうるということでもある。たとえば、ある項目について今まで

知られていなかった典拠が明らかになれば、影響関係を辿ることが可能になる。デイドロ独自の見解と考えられていたものが、実は何十年前の科学者が提唱していたものだった、と訂正されることも十分にありうる。

このような直接的な発見の他に、派生的効果とでも言うべきものがある。先にサヴァリーの『通商事典』の版本について述べたが、典拠の特定に至る過程で、『通商事典』が当時のフランスにおいて広く読まれていた実態が垣間みえる。

これは『百科全書』の外部における派生的効果であるが、『百科全書』それ自体の研究にとつても、典拠の調査に付随する成果は多岐にわたる。そのうち最大のもの、第二章の最後で触れたように、無署名項目の筆者を推定する材料が得られることである。

『百科全書』には署名のない項目が膨大な数で存在する。それらの無署名項目は、その性質によって三種類に区分される。すなわち、デイドロが執筆陣の一員として提供した項目、デイドロが匿名で書いた項目、そしてデイドロ以外の協力者たちが匿名を条件に寄稿した項目の三つである。無署名項目をめぐる問題は、『百科全書』

研究において最も複雑な部類に属する。それぞれの項目が誰によって書かれたかについて、指示に混乱があるからである。

『百科全書』第一巻の序論には、執筆者の指示方法に関する説明が見られる。各執筆者には固有の略号が割り当てられ、項目末尾にその記号が括弧にくくられた形で示される。略号の一覧は序論の末尾に掲げられているので、読者はその一覧表によって項目執筆者の名前を知ることができるようになっている。⁽¹⁰⁾ 略号は基本的にはアルファベット一文字だが、それ以外の記号が割り当てられていることもある。いくつかの項目を単発で寄稿した文筆家については、その度ごとに名前が記されている。ところで、執筆者デイドロを見分ける記号は二種類あった。一つは見出し語の頭に添えられた星印(アステリクス)であり、もう一つは何の記号もないことである。記号の欠如が記号の役割を果たしているのである。両者には一応の区別があり、これも第一巻の序論で明確に説明されている。つまり、デイドロが執筆陣の一人として専門的知識を活かして書いた項目は無記号、適当な執筆者が他にいないために編集責任者として用意した項目は星印つ

き、という区別が立てられているのである。⁽¹¹⁾

無署名項目はデイドロが専門家の立場で書いたものだという原則が徹底しているならば、問題は単純である。

しかし、すでに第一巻において、この原則は早くも平然と無視されている。これを追認するように、第二巻の末尾には、執筆者の指示のない項目が必ずしもデイドロによるものではない旨が明記されている。⁽¹²⁾ 匿名を条件に協力した人々の項目には、当然のように署名がない。言い換えれば、無署名項目にはデイドロが執筆したものと匿名を望む文筆家の手になるものとが混じっているのである。

問題をさらに複雑にしているのは、『百科全書』の出版が弾圧によって一時中断したことである。弾圧の影響は甚大で、名前を明かす文筆家は減少した。デイドロ自身も星印を用いる頻度が極端に減り、第十巻の初めの方に収められた《紙の大理石模様つけ職人》という項目を最後に、『百科全書』から星印が消える。もともとデイドロは星印と無記号とを厳密に使い分けていたわけではなく、星印にはこだわっていない。自分が書いたという明白な証拠を抹消することに不都合はなかった。こうし

て、一七六五年に一括して出版された第八巻以降の十冊では、無署名項目の割合が飛躍的に増大することとなった。

ここまでの議論を整理しておこう。無署名項目には、初期段階においてデイドロが専門家として書いた項目、弾圧以後に顕著になったデイドロによる匿名項目、全巻にわたって存在する（とはいえずやはり弾圧以後に増加した）デイドロ以外の協力者たちによる匿名項目の三種類がある。このうち前二者については厳密に区別する必要がなく、署名の欠如に込められた意味に違いがあることを念頭に置いておくだけでよい。

このように、無署名項目は均質ではない。デイドロが書いたものもあれば、そうでないものもある。デイドロ以外の匿名協力者も一人や二人ではない。危険視されそうな項目に限って署名を避ける者もある。これら雑多な項目群を整理することは、とりもなおさず『百科全書』研究の環境を整備することである。その整理に典拠の調査が威力を発揮する。

第三章の初めの部分で、ある主題に関する一連の項目が特定の人物に任された可能性に触れた。依頼を受けた

協力者は典拠として活用するに値する文献を選び、もっぱらそれに基づいて『百科全書』のための項目を執筆する。用意された項目はアルファベット順に配置され、他の膨大な項目の中に埋没する。我々は逆の順序を辿って、隠されていた秩序を再構築することになる。その実例となる無署名項目群を二種類示すことにしよう。一方は日本の植物を、他方は日本の習俗を扱ったもので、後者についてはドルバックが執筆したことを論証しよう。

『百科全書』には日本の植物を扱った項目が全部で九十九存在するが、そのうち署名のないものが八十八に達する。それらは一つを除いて第八巻以降に収められているのだが、『百科全書』の出版経緯を思い起こせば、まとめて発行された十冊分に関して、ある一人の協力者が日本の植物を担当することに決められた可能性が高い。第八巻以降、無署名、内容は日本の植物という条件を満たす八十七の項目を、さらに詳しく分析してみよう。すると、このうちの七十七項目がケンペルの『廻国奇観』を典拠としていることが判明する。これは主として植物学的な知見をラテン語でまとめた著作で、その第五章には日本の植物に関する詳細な説明が見出される。『百科

『全書』に取り込まれたのは、『廻国奇観』で記述された植物のごく一部にとどまり、何を判断基準に取捨選択がなされたかは分からない。しかし、『廻国奇観』を典拠とする七十七の項目が、同一人物によって執筆されたという意味で均質なまとまりを形成していることは、もはや疑いの余地がない。これら一連の項目を誰が執筆したかについては、決定的な証拠がなく、断言はできない。

しかし、執筆者の特定に成功する場合もある。『百科全書』に対する弾圧の結果、デイドロにとっての主たる協力者がドルバックとジョークールになったことは、先に触れた通りである。このうちジョークールの書いた項目が全体の四分の一に達することもすでに述べた。ジョークールが自分の項目を無署名で提供することは、ほとんどないと言ってよい。それに対して、ドルバックが割り当てのマイナス記号によって署名するのは、鉱物学に関する項目にほぼ限定されている。表面的にはドルバックの貢献は目立たないが、彼が多くの重要項目を寄稿していることは、従来の研究で明らかとなっている。英国の研究者ジョン・ラフは、その著『デイドロとダランペールの『百科全書』についての論』の第三章において、

二百二十ページにわたってドルバックの貢献を具体例に即して論証している。ラフによれば、ドルバック執筆と推定される無署名項目は六百七十五の多きに達するが、その分野は科学技術など専門の鉱物学に近いものにとどまらず、世界中の主だった文化をほぼ網羅している。日本文化もその例外ではない。

ラフがドルバック執筆と認定した日本文化に関する項目は、第八巻の《山伏》から最終第十七巻の《浄土宗》までの二十一である。ラフの論証は、もっぱら典拠の調査に基づいている。本論第三章の初めの部分で、蔵書目録に記載された文献が『百科全書』の項目に利用されている可能性が高いことを述べた。ドルバックには、死後に編集された蔵書目録が存在する。ラフはこの蔵書目録を調査し、アベ・プレヴォ(『マノン・レスコー』の作者である)が編纂した『旅行記大全』に注目した。これは当時の様々な旅行記をよりすぐってまとめたもので、第十巻の四百八十ページ以降が日本篇となっている。プレヴォはケンペルの『日本誌』に依拠しつつ、時にシャルヴォワその他を参照して日本に関する記事をまとめている。ラフはこの旅行記集と『百科全書』の項目を照

合するなどして、一部の無署名項目の筆者をドルバックだと推定したのである。

典拠に注目したところまではよい。しかし、プレヴォは真の典拠ではなかった。内容がある程度重なるというだけでは決定的な証拠とはならない。詳しく調べてみれば、日本に関するドルバックの項目の典拠は、プレヴォではなくケンベルであることが分かる。項目《傾城町》を例にとって論証しよう。まず『百科全書』第九巻に収められた無署名項目の冒頭部を引く。

傾城町 日本では、遊女や娼婦専用の街区のことをこのように呼ぶ。貧しい人々は娘たちが十歳にもなると傾城町に売って、淫らな商売を覚えさせる。⁽¹⁵⁾

ここで注目すべきは「十歳にもなると」という具体的な年齢の記述である。この部分に対応するプレヴォの文章は次のようになっている。

彼女たちはごく幼い時期に、この奇妙な商売を司る人々によって買われる。彼らは娘たちを三十人ま

で同じ置屋にとどめておくことができる。⁽¹⁵⁾

年齢については「ごく幼い時期に」としか記されていない。プレヴォの『旅行記大全』が『百科全書』の項目の典拠であるならば、この項目の執筆者は十歳という年齢を自分で考えついたことになる。しかし、数字や固有名詞は勝手に捻出できるものではない。『旅行記大全』と『百科全書』は内容的に重なってはいるが、直接の因果関係はないと考えるべきである。

もっとも、これだけでは『旅行記大全』が典拠であるという説に疑問を呈したにすぎない。ケンベルの『日本誌』の該当箇所を調べ、『百科全書』の項目の記述に合うことを確認しておこう。

娘たちはごく幼い時期に両親のもとから買い取られる。その値段は美しさや望まれる年齢によって異なる。望まれる年齢はおおむね十歳から十二歳である。それぞれの女衛は、娘たちを七人から三十人まで、可能な範囲で同じ置屋にとどめておくことができる。⁽¹⁶⁾

ここには「十歳から十二歳」という具体的な年齢の記述もあれば、「ごく幼い時期に」というプレヴォと同じ表現も見られる。人数の記載は『百科全書』では省かれたが、プレヴォには残されたことも分かる。プレヴォが日本に関する部分を主としてケンペルに依拠して書いたことは、彼自身が明言している通りであるが、『百科全書』の項目《傾城町》がケンペルに基づいていることも明らかである。言うなれば、『旅行記大全』と『百科全書』の項目は、親子ではなく兄弟の関係にあるのである。

それでは、この項目をドルバック執筆とみなしたラフの推定は間違っていたのであろうか。確かに判断の根拠には問題があったが、推定自体は正しかったと言える。

「ドルバックはプレヴォの『旅行記大全』に基づいて日本に関する項目を執筆したが、署名はしなかった」というラフ説のうち、「プレヴォの『旅行記大全』を「ケンペルの『日本誌』」と読み換えればよいのである。ラフがプレヴォを典拠と考えたのは、それがドルバックの蔵書目録に記載されているうえに、内容の一致が見られたからである。ケンペルの『日本誌』もまた、蔵書目録に

掲載されている⁽¹⁷⁾。内容の比較検討からして、ラフ説に上記の修正を加えることは極めて合理的である。

ドルバックがケンペルの『日本誌』を参照して日本に関する項目をまとめて執筆していたとすると、『日本誌』に基づいて書かれたことが確実な無署名項目のうち、ラフの一覧表から漏れたものもドルバック執筆と推定しうる。たとえば、《人皇》(第十一巻)は『日本誌』第二章をふまえている。これだけでも判断材料としては十分だが、『日本誌』の該当箇所直前を典拠とする《公家》(第九巻)という無署名項目が、ラフによってプレヴォをもとにしたドルバックの項目と推定されていることも、傍証になるだろう。つまり、《公家》と《人皇》は、同一人物が同一典拠を用いて、そしておそらくは間を置かずに、執筆したものにちがいない。このようにして、《薬師》(第八巻)や《祭》(第十巻)など十以上の項目をドルバックに帰すことが可能となる。典拠の研究をもとに、無署名項目の筆者を特定することに成功したのである。

結

『百科全書』は多くの新しい思想を提供しているが、その一方でそれまでの知識の集成という側面も持っている。何らかの形で過去の文献を取り込んだ項目は膨大な数に達する。典拠の研究が欠かせない所以である。

典拠の調査は、項目への直接的な影響関係を明らかにするばかりか、間接的な成果も数多くもたらす。無署名項目をめぐる問題の複雑さを解きほぐす役割は、その最たるものである。多くの障碍を乗り越えて典拠を特定するにはどうすればよいか、判明した典拠をもとに無署名項目を整理するにはどういう手順をふむべきか、それらについては具体的に示した通りであり、ここでは繰り返さない。ひとことと言えば、典拠の調査は『百科全書』研究の環境整備にとって本質的な意義を持つ。

このように、典拠の調査は極めて重要であるが、それが効果を発揮するためには、実証的な方法を用いなければならぬ。典拠の現物を博捜し、該当箇所を『百科全書』と照合し、異同を検討する。その積み重ねが必須である。地道で綿密な作業の裏打ちのない研究は、およそ

研究の名に値しないものになるだろう。

- (1) ジャック・ブルーストは、そのような例としてイタリ
ア・ルネサンスの哲学者などを挙げてゐる。(Jacques
Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Paris, Armand Colin,
1962; Genève, Slatkine, 1982, p. 248.)
- (2) *Encyclopédie*, t. VI, p. 380.
- (3) *Encyclopédie*, t. IV, p. 501.
- (4) ウーレンの建築家ヨハン＝スルンハルト・フィッシャ
ー・フォン・エルラン (Johann Bernhard Fischer von
Erlach) は、典拠となった『歴史的建筑についての論』
は、世界中の建築物を独仏両言語によって説明している。
- (5) *Encyclopédie*, t. II, p. 257.
- (6) «Nouvelle Arithmétique Binaire», in *Histoire de l'A-*
cadémie royale des Sciences, année 1703, pp. 58-63. 科学
アカデミーの年報は、業績の報告や追悼演説などを収めた
歴史の部と、学術論文を載せた論考の部から成り、そのそ
れぞれについて一からページが振られている。項目(二進
法算術)の典拠となった箇所は、歴史の部に掲載された文
章である。同年の論考の部に収められたライブニッツによ
る二進法に関する論文を紹介した記事であるが、筆者はフ
ォルメーその人であり(ただし署名はない)、彼は過去に
自分が書いたものをそのまま『百科全書』に提供したので
ある。

(7) *Encyclopédie*, t. V, p. 247.

(8) «L'origine du Jeu des Echecs», in *Histoire de l'Académie royale des Inscriptions et Belles Lettres*, t. 5 (1718-1725), pp. 250-259.

(9) その実例として、『百科全書』第十六巻に収められた項目《茶》を挙げておく。この項目にはケンネルという名が類出する。エンゲルベルト・ケンネルはオランダ東インド会社付のドイツ人医師で、元禄期の日本に滞在した経験をもとに『日本誌』を著した。フランス語訳は一七二九年に出版されている。その付録として収められた茶に関する論文は、ジョークールの項目とおおむね一致する。字句まで同じ部分も多い。しかし、記述の順序が違ったり、ケンネルにはない情報がジョークールに見られるなど、通常のジョークールの典拠活用法とは異なる点がある。この疑念は知識の集積によって生じたものである。調査の結果、真の典拠はイエズス会士シャルヴォワ神父の『日本史』であることが明らかとなった。一七三六年に出版されたシャルヴォワ神父の『日本史』は、本論として日本における布教の歴史を取り上げる前に、日本概論を置いている。そのうちの一章が茶の記述に費されているが、シャルヴォワ

はケンネルに依拠しつつその過ちを正すという立場から、ケンネルの文章を書き直している。シャルヴォワが手を加えた文章は、ジョークールの項目の記述と一致した。ジョークールが写したのは、ケンネルではなくシャルヴォワだったのである。なお、ジョークールはシャルヴォワの名前を一切表に出してゐない。

(10) *Encyclopédie*, t. I, p. xlii.

(11) *Encyclopédie*, t. I, p. xlvii.

(12) *Encyclopédie*, t. II, p. 871 verso. なお、同様の注意書きは後続の巻にも散発的に見受けられる。

(13) *Catalogue des livres de la bibliothèque de feu M. le baron d'Holbach*, Paris, De Bure l'aîné, 1789.

(14) *Encyclopédie*, t. IX, p. 114.

(15) Prévost, éd., *Histoire générale des voyages*, t. 10, p. 540.

(16) Engelbert Kämpfer, *Histoire naturelle, civile et ecclésiastique de l'empire du Japon*, t. 2, p. 8.

(17) *Catalogue des livres de la bibliothèque de feu M. le baron d'Holbach*, p. 251.

(一橋大学専任講師)